

『アルディングロと至福の島々』(4)

ヴィルヘルム・ハインゼ著、尾田 一正(訳)

(続き)

私はこうした出来事ですっかり混乱してしまい、どうやって切り抜ければいいのかわからなくなっていた。アルディングロかマルコ・アントーニオのどちらかを犠牲にするほかなかった。そして最初の考えを前にして、私の魂はまるでチェチーリアの死を前にしたかのように恐怖でわなないた。至る所に輝き出している豊かな内面を持った、自然から報復者の腕を付与された立派な若者か、最もすぐれたものをつまらない感情とわずかばかりの利益のために抹殺してしまおうとする出来そこないの邪悪な男のどちらか一方を失ってしまう。それ以外に何の選択肢も手段も存在しなかった。

私はよく考えてから彼に答えた。《君は僕を君の親友と見なしてくれなくてはならない。君の勇気と君の知恵には僕は何の疑いもさしはさむことはできない。けれども、君がしていることによって君の命までもがこの上ない危険にさらされているのだということをもう一度よく考えて欲しい。《

《奴隷状態を耐え忍び、不正に苦しんでいる僕の命が一体何だと言うのだろう《、と彼は答えた。《恥ずべき不正、残酷きわまりない不正！僕の中で生きているものは永遠に生き続け、いかなる暴力もそれを破壊しつくすことはできないのだということを僕は知っている。僕は昔も今もこれからも僕のままだ。その神々しい本質がいかなる時代にあっても低劣な人間関係の災厄から救い出そうとする高貴な精神。ああ、皆が僕のようにあったなら！そうすればフィレンツェの専制政治もすぐになくなっていくだろうに。しかし彼らは死という言葉を恐れ、自分たちはそこで冷たくそして青

白く、硬直して板の上に横たわるものにほかならず、しかもそれはほんとうの冥界の単なる亡霊にすぎず、その亡霊が彼らのいやしい本質を自らの厭うべき欲求に従ってさんざん責め苛むと信じるのだ。そして、使徒の声を持つあらゆる純粋な魂は、死ぬ勇気も持たず、みじめな境遇から自らを解放する勇気を持たない者を軽蔑するのだ。《

私は神が語るのを聞く思いだった。かくも気高く、崇高にその男は私の前に立っていた。私は彼を抱き締めずにはいられなかった。

しかしながら、最も微妙なのはチェチーリアのことだった。彼女のことで彼は一番頭を悩ませ、彼はあらゆる局面を考慮した。彼は結局はこも何とかなるだろうと信じた。そして、なんとしても彼女自身にも一役買ってもらおうと思った。彼女の並外れた精神の柔軟さとその他の能力をもってすれば、その役割は重すぎはしなかった。彼は今夜のうちに思い切って彼女と話をしなければならず、彼女があらかじめそのための準備をする必要があると考えていた。

ところで私たちには、事態の全貌がますますはっきりしてきた。マルコ・アントーニオが最後のヴェネツィア訪問の時に私たちの家に寄ったのは、単なる社交辞令からではなかったのだ。というのも、彼はそれを以前自分の花嫁を訪問した際には行わなかったからだ。若きフレスコバルディが成長し、ただの画家が彼の中に潜んでいるわけではないことを大公は勘づいたのかも知れなかった。その画才ゆえにフィレンツェの貴族は彼をいくぶん軽蔑し、時にはこの若者を屈服させようとしたのだ。父親の殺害者は彼をヴェネツィアで偵察し、心の疚しさに駆られたのだ。それからあとのことは自ずから生じてきたのだ。大公は、彼のことをもっと良く知るために、そしてアルディングロが本当に危険人物かどうかを知るために、彼に自分の肖像画を描かせたのだ。アルディングロは全く悪意のない言葉でこう言って締めくくった。〈父は武具師で良い剣を作りました。〈この言葉は、恐らく天の怒りが犯罪者に死刑判決を、その没落を予告するために思いつかせたものだった。どのみちそうなる定めだったとしても。

この出来事の原因を私たちは当時は知らず、アルディングロはそれをよ

うやくフィレンツェに戻ってから知ったのだった。マルコ・アントーニオはその地ですぐにイザベラに夢中になり、自らの財力と彼女にとって新鮮な快い響きのヴェネツィア方言とで、物珍しさも手伝って、逢瀬にまでこぎつけたのだ。しかしながら期待した満足のかわりに、彼はアルディングロの父親の秘密の企てによって、彼女の部屋に年老いて痩せた山羊が繋がれているのを見だし、その部屋からまたこっそり忍び出ていったのだった。まるでその部屋に足を踏み入れたことなどなかったかのように。これによって彼女のもとで笑い物にされて、この色恋沙汰はすっかり終わりを告げたのだ。マルコ・アントーニオはこの出来事を自分の経歴の中の愉快なはずらとは受け取らなかったものの、すぐに復讐するわけにもいかず、それをむしろ秘密にしたのだ。大公はやがてそれについて知らされ、その後、部下を知る男として彼を自分の目的のために利用したのだ。まだ少年だったアルディングロは、そうしたことに心を煩わされることはなかった。かくして、常に小さなことから重大な結果が生じてくるのだ。

私はそれから母のところに行き、彼は自分の部屋に閉じこもった。真夜中に彼は忍び足で出てきて、チェチャーリアのいる庭へと下りて行った。二人は互いに愛し始めてすぐに、他のだれも理解できず、まったく疑いを持たれない、目と耳のための合図を考え出していたのだった。彼女は彼が来たのを知ると驚いた。この時期にはいかなる逢引きも行われることはなっていなかった。そして彼女は行くべきか行くべきではないのかよく考えた。けれどもそれから彼がさらに合図を送ると、—その合図があったら、何でも敢えて行わなければならないことになっていた。なぜなら、これもまた彼らは最高の危険を察知した場合にそなえて、この合図を取り決めていたのだ—彼女は震えながらドアの方へ行き、その場にくずおれた。

《チェチャーリア《と彼は堀ぎわの人目につかない茂みの中で彼女といっしょになると彼女に話しかけた。》あなたの花婿の先手を打たないと僕は身の破滅です。《そして、彼女に賊に襲われた夜の出来事を語り、彼女がまだ知らないことのすべてを短い言葉で話して聞かせた。》明日の夜、なんとしてもあの男をこの世から片づけてやります。そして僕にはお祭り

の雑踏の中でそのための機会に恵まれているはずだと期待しています。もしもあなたが僕の処刑される様子を目にしたくないならば。《

一語一語が彼女の胸に突き刺さった。

《ああ、どんな嵐が私を襲ってくることでしょう！《と彼女は恐怖の叫び声を上げ、長い茫然自失状態のあとで言った。》もう私は荒れ狂う大波のただ中をよるめています。深淵から深淵へと投げ出され、そして暴風が荒れ狂い、ああ、船が難破して荒涼とした無人島に流れ着くことができたなら！けれども私たちは荒れ狂う大波の中に呑み込まれていくのです。

《チェーチーリア《、彼はそれに答えた。》きっと首尾よく危険から逃れることができるよ。勇気をお出しなさい。天上の存在よ！荒れ狂う波が星辰を傷つけることはありません。星辰はやがていっそう輝かしく現れ出て、永遠に澄明な輝きを放つのです。

だれも僕たちの愛については知りません（この高貴な男は自分の友を何としても危険に巻き込まないようにしようとしたのだ）。だれも僕に対するマルコ・アントーニオの恥ずべき企てのことを知りません。彼の密偵で、僕の父の殺害者はもう荒涼とした岩場で朽ちています。こういうことは、やむをえない人以外には打ち明けるものではありません。大公はまだここから遠く離れた所にいるので、そうたやすく僕を毘にはめるわけにはいきません。混乱している短い時間の間、僕のことは頭から消し去って、僕のことなどまるで知らないふりをするのです。そうすればあなたは安全です。僕には神のご加護があるのです。そうでなければ、僕は死から逃れられず、そして逃げ道も教えてはもらえなかったことでしょう。《

《おお、いとしい人よ、あなたのことを一瞬たりと忘れたことがあったのでしょうか。あなたはどのようにして僕の至福と苦しみを忘れることができるのですか。《彼女は涙を流しながら彼の高鳴る胸に顔を埋めた。けれどもまた慌ただしく体を離すと、彼の腕にすがりながら、彼を引き寄せたり、押しつけたりした。》ここから逃げてちょうだい！ああ、あなたと知り合いになんかならなければよかったのに。ああ、不幸な私！離ればなれになってしまうのはとてもつらいことだけど、どうかお願いだから。《そして彼女

は彼の足元にくずおれ、彼の両膝にすがりついた。どうか私のために自制して、私の家族の平穏な生活のために、復讐だけは思いとどまってちょうだい! 残酷な運命が鉄の鎖で私を悲惨な生活に縛りつけ、私はそこから逃れることができないのです。けれどもあなたは他国に逃れて、その立派な立居振舞でどうか幸せになって下さい。私を捨てて逃げて。ああ、神様《、と彼女はすすり泣いた。》一体いつ、どのように、どこで再会できるのか、そもそもいつか再会が叶うのか、そんなことはだれにもわかるもんですか! 《

アルディングロは両腕で彼女をしかと抱き締め、感極まった声で彼女に囁いた。《何をそんなにびくびくしているんだい。しっかりして、気確かにお持ちなさい。自然界ですべてに先駆けて存在した愛と正義が勝利を収めんことを! あなたには将来の日々への希望はないのですか? 高貴な若者たちがあなたのことを恋い焦がれているのに、あなたはかくも邪悪な怪物のそばに横になり、その美しい姿をこのうえない苦悩と嫌悪の中であの男に辱めさせているのです。あなたの胸の中のこのかくも激しく高鳴る心が自分のために何もなさず、その生まれつき持っている活動の方向を他人の意志によって変えられてしまうほどわずかしき自分の力を持たないとは。おお、チェチーリアよ、崇高な人よ、どうか自分の価値に目覚めて下さい! あなた自身の幸せのために、そして僕はあなたのことをよく知っていたので、この秘密を話して聞かせたのです。

僕はあの卑劣な男を告発し、あの男に決闘を申し込むべきだったのだろうか? なんと愚かなことだろう! この上ない危険に晒されながら待つ? なんと馬鹿げたことだろう! 奴を自由に歩き回らせ、耐え忍び、苦しみ、沈黙し、そしてそこからこっそり逃げ出す? ああ、そんなことをしたら僕はあなたを僕の胸に抱き締め、この地上で呼吸するに値しません。そんなとをすれば、僕は地中深くで半分踏み殺されかけたみじめこの上ない虫けらに違いありません。

時間は貴重です。僕たちはおしゃべりをしているひまはありません。僕はあなたに永遠の運命の書から語ります。卑劣な暗殺者のマルコ・アントニオはすべての彼の悪行を償うために、僕の報復の腕にかかって死な

なければならないのです。さもないと、あなたは僕とあなたを死の手にゆだね、人々に辱められることになるのです。ここには選択の余地はありません。そして僕はあなたの澄んだ精神と高貴な感情がそのためには十分であることを知っています。僕のことなら、心配は一切無用です。あなたのためにはあなたの鋭い目が容易に逃げ道を見つけ出ししてくれることでしょう。そして、あなたは怪我をすることも危険にさらされることもなく、難局をうまく切り抜けることでしょう。《

《さあ、さんざん心配するがいいわ。血も涙もない人！《と彼女はぷりぷりしながら彼に答えた。《安心したいのなら、まず私に剣を抜いてちょうだい。ああ、大気に招き寄せられて私は火を吐く噴火口のもとに立っているのです。私は破滅にさらされて意識が遠のきそう。ああ、私が無実ゆえの限りのない苦悩を見せつけて、それによって人々に過ちを警告することができたなら！《

彼女があまりにも素早く彼から身を引き離して自分の部屋へと去ったので、アルディングロはもはや彼女に答えることはできなかった。彼女は途中で何度か振り返ったものの、心ここにあらずで、再び戻ってくることはなかった。

彼は私にこの説得について、およそ彼が期待しただけの効果を彼女に与えた、とだけ言った。

翌日の早朝、婚礼が行われた。チェチーリアは宴会が始まっていた午後になって、いつにもまして魅力的な姿で登場した。寝不足とこれから起こるはずのことについてずっと思いめぐらせていたため、彼女の生命力が高まり、彼女の顔にはこのうえなく愛らしい赤味がさしていた。

アルディングロは一日中犯行の準備をしていた。彼は緊急の場合にそなえて自分で仮面を作り、髪形を変え、帽子と服装も変え、土地の農夫になりすまし、いかなる場合でも、落ちつきはらって逃亡を開始できるようにしていた。私の母と私は婚礼に参加していた。

出席者は大勢だった。食卓と広間と小部屋は豪華絢爛に巧みに整えられ、そこは華やかさと喜びにあふれていた。花嫁はこの慣れない気分

浸っているようにみえたが、いたずらには乙女らしく慎ましやかに一つ一つ応じた。だれもが幸せ者の花婿に代わって、愛のベッドで美しい花を摘み取りたいという甘美な望みを心に抱いて、彼女を獲得した幸せ者の花婿を羨んでいるように見えた。

夕方になって舞踏会が始まった。蠟燭が燃えている時、やがて花嫁と花婿が姿を消し、人々はそれを見てほほ笑んだ。花婿は長い時間が経ってからようやく再び姿を現し、若い男たちはふざけて彼の不節制と節制に対して露骨にやんやの喝采を送った。しかしその弁明にフレスカニア風のジョークが聞こえてきた。誘惑された騎士は朝には早くも、激しい嵐をものともせず、砦の上に旗を立てているだろう、と。彼は笑ったが、しかし私にはそれは愛を交わしたあとの快樂の笑いではないように思えた。そして、窓の方に向かって手で合図を送った。すると見よ!打ち上げ花火が空高く上がり、湖の上で美しい弧を描き、落下しながら炸裂した。そのあとすぐ、花嫁も姿を現し、母親たちと女性たちから祝福を受け、バラのように頬を赤らめた。

彼女は張出しの一番良い席に連れて行かれ、見せ物を見物した。すると突然仕掛花火が空に向かって巨大なヤシの木のようにざわめきながら昇っていった。それから次々に新しい花火が打ち上げられた。打ち上げ場所は邸宅からさほど遠くない湖の岩の多い高い岸の上にあった。こういうことに通じていて、指示を出していた花婿は、何度か大きく間があいたので、ハッパをかけるために、自分で下へ走り下りていった。そしてちょうど狭くて急な木の階段のところで彼はアルディングロに喉をむんずとつかまれ、下から心臓めがけて短刀の鋭い一撃を受けた。アルディングロは男にすばやく囁いた。《俺はフレスコバルディの息子だ!おまえの花嫁は俺の愛人だ。俺たちの愛の結晶がやがて俺の父親の財産のかわりにおまえの財産を相続するだろう。》

彼はそこに横たわり、もう動かなかった。アルディングロは姿を消した。だれも彼に気づいたものはなく、下の召使たちが、邸宅から遠く離れたところで口を開けて花火に見とれ、歓声を上げ、大騒ぎしていた人々の移動

を禁じた。そして上でも人々は同様にお喋りに興じ、花火に見とれていた彼は花火が続く間中、そこに横たわっていた。花火が終わり、召使たちが再び中に入ってくると、突然悲鳴が響き渡った。人々はドアのところに殺到した。《花婿が殺された!》と突然口々に叫び声が上がった。チェチーリアは泣き叫びながら走り出てくると、はっきりと聞き取った。《下の階段のところで胸をひと突きされて殺された!》《彼女は気を失ってその場にぐずおれ、両腕と両足は生気を失い、顔からは血の気が失せ、首をうなだれていた。人々は彼女を助け起こし、椅子に運び、強い気付け薬を嗅がせた。あたり一面は混乱状態で、死者は下の部屋に運ばれた。人々は衣服を引き剥がして傷口を調べた。傷はもろに心臓に達していて、救うすべはもはや無かった。チェチーリアは再び意識を取り戻した。》私はどうしたの、何が起きたの?ここはどこ?《と彼女は定まらない視線で呻くように言った。》ああ、死んでしまったわ、死んでしまったわ!だれが犯人なの!ああ、不幸な私!《そして美しいブロンドの巻毛を掻きむしり、衣服を体から引きちぎり、さながらバッカスの女祭司のように荒れ狂った。

アルディンゲロを心配するあまり、この出来事は私を喜ばせたと言っても許されると思う。ああ、汝、女たちよ、汝らのおとぼけにかなう男がこれまでいたのだろうか!チェチーリアは何としても彼のところに行こうとしたが、人々が彼女を押し止めた。《おお、神様、何という結婚の宴なのでしょう!》と彼女はむせび泣きながら言った。そして涙がこぼれ落ちた。けれどももしも私がすべてを知っていたら、彼女に大いに同情したことだろう。

マルコ・アントーニオの親戚は、一その中には彼の嫁いだ姉がいたののだが―押し黙ったままなんともいいようのない表情を浮かべ、何から手を付けたらいいか分からない状態だった。チェチーリアの兄たちと両親はけれども冷静さを失うことはなかった。そして一番上の兄―彼も結婚していたののだが―が彼女の手を握って、彼女に言った。《落ち着くんだ。起きてしまったことは変えようがない。だから冷静でいなさい。おまえにとっては今が正念場なんだから!はっきり言ってごらん。マルコ・アントーニオは

実のところおまえともう愛を交わしたのかい、それともそれはまだなのかい？それ以外のことはあとで可能なかぎり厳しく調査してやろう。《彼女は両腕で頭を抱え込み、両目を覆い、そして溜め息をつき、泣きながら言った。》ああ、それがまだだったら良かったのに。私がまだ以前のままだったら！《

姉はこれに答えて言った。《私たちはここで突然奇妙な状況に陥っていて、やって来た時と同じように何もなかったかのように帰っていくのはむづかしいことだわ。《

《あなたにもご覧いただけるように《、チェチャーリアの父が言った。》
私たちは何も不当なことを要求しないということを。そのために私たちの娘をすぐに確実な場所に移します。そして、あなたがた親族の方幾人かと、私の息子たちに彼女に付き添ってもらいたいのです。これは異常事態です。私たちはこれから上級参事会の判断に従います。ところで私たちの側でもすべてのことを仔細に聴き取り調査するつもりです。《

この場に居合わせた共和国の長老たちと名士たちはすぐに、とある部屋に集合し、輪になって座った。親族は近くにいた。他の客人は舞踏の間に、そして下の部屋のドアは閉ざされた。召使たちはようやく、ポツポツと戻ってきた。だれも何も知らず、どこにもわずかの痕跡も見つけ出すことはできなかった。客人たちは大勢で、しかもいろいろな人がいた。なるほど彼らは殺された男の前にチェチャーリアに求婚し、殺された男に対して密かに敵意を抱いていたからなのだが、一だからといって安易に彼らを連行するわけにはいかなかった。犯行があった時、彼らがどこにいたかを人々はこっそりときわめて嚴重に取り調べた。確かな人々が、彼らは自分たちといっしょにいたと彼らのアリバイを証言した。

その限りでは、調査は無駄だった。人々はそれから容疑者を確保するために部下を地方に派遣した。そのことはむろんもっと早くやっておかねければならなかったのだが、騒ぎが起きたばかりの時には、だれもそこまで考えが及ばなかったのだ。そして健脚の持ち主のアルディングゲロは、この時にはもう安全なところにいたのだ。

チェチーリアについて言うと、彼女を厳しく取り調べることはできなかった。なぜなら、彼女の両親と兄たちの裕福さと名声がそれを許さなかったのだ。二人の兄は、トルコの艦隊に対する勝利のさいに偉大なる英雄という名声を獲得していたのだ。皆はそれ以外にもこの魅力的な女性に好意を抱き、だれも花婿には好意的ではなかったのだ。多くの男たちが、ヴェネツィアの最も持参金の多い結婚相手の一人で、いまだみずみずしく咲き誇っている花嫁を完全に手に入れるか、あるいはこのような状況に置かれた場合、事が有利に運ぶことを期待したのだ。人はひとたび死んでしまうと、すぐにすべてが不利に働き始め、そして、生き残ったものが常に有利な立場に立つのだ。これが物事の本質だ。死者を助けることはもはや叶わない。そこから何も生じてくることはない、と彼らは考えるのだ。ヴェネツィアでもそうだった。そこにチェチーリアはその夜のうちに兄たちと彼女の花婿の親族に伴われて、参事会の幾人かの人物たちとともに行かなくてはならなかった。やがて彼女の妊娠が誰の目にも明らかになった。彼女はなるほど型通りにきちんと見張られ、尋問された。しかし、いかなる供述にも一点の疑惑もなく、彼女には一身でバルトルスとバルドゥスを兼ねた有能な弁護士がついていたので、ついには釈放された。そして彼女自身は見事に自己をコントロールするすべをわきまえ、自分の役割をものの見事に演じ切った。アルディングロとの短い交際の間に彼女の類まれな天賦の才が見事に開花し、実を結んだのだ。

それから9カ月目の初めに、彼女は法的証人の臨席のもとで一人の元気な男の子を産んだ。その子はマルコ・アントーニオ・ジョヴァンニ・エ・パオロという洗礼名をもらった。しかしだれもその秘められた意味を知らなかった。彼女はそれによってマルコ・アントーニオの全財産を法的に相続し、彼女の兄たちが彼のために最良のラテン語詩人の含蓄に富んだ碑文の彫られた、最も有名な彫刻家の手になる見事な墓碑を購入し、長い間喪に服しあらゆる娯楽を遠ざけて引きこもって生活した。

アルディングロは首尾よくなりし遂げた犯行のあと、回り道をして素早く自分の部屋に舞い戻り、さっと着替えを済ませた。彼は誰にも見られてい

ない自信があった。そして目立つ服装で外を歩き回りたくなかった。私たちの住居には彼は出入りが自由だった。なぜなら、彼は自分が住んでいる棟の屋外に通じるドアの鍵を持っていたからだ。いずれにせよ、屋敷からはどこからでも、湖の上空で繰り広げられた魔法の演劇の花火を見物するのによい席へとつながっていた。彼は何が起きても素早く落ち着きを取り戻し、私が母といっしょに帰宅して、彼にうまくいったという合図を送るまで庭の中の彼の部屋のそばに身を潜めた。宴はすっかり台無しになり、私は成り行きを見守るため、しばらくの間そこに残った。

この地でもヴェネツィアでも、彼にはいかなる嫌疑も降りかからなかった。ヴェネツィアでは、以前情熱的にチェチャーリアに求婚していた何人かの若い紳士たちに対して厳しい取り調べが行われた。けれども何一つ明らかにならず、真相は闇の中だった。

第二部

アルディングロは、もはやこの地に長居するつもりはなかった。彼を引き寄せ、彼がその回りをめぐっていた太陽も姿を消していた。しかし彼は今のところ、またヴェネツィアに行く気もなかった。たとえその地の状況はこの上なく順調だったとしても、彼はいずれ彼を苦しめることになりそうな物事に気づいていた。復讐を遂げたという甘美な思い。チェチャーリアから遠いところにいるという心痛、彼女のことを思うが故の苦悩、自分自身の身の安全に対する心配が、彼の心の中でまるで四月の天気のように千々に乱れた。長居は危険だった。なぜなら、マルコ・アントーニオの書類の中にコジモの指示が見つからないとも限らなかったからだ。そうかといって、すぐにこの地を去ることは、疑念を招く恐れがあった。ついに彼は、あらゆる状況を見極めて、あと数日待ち、その間はコジモに対して細心の警戒を怠らずにしようと決心した。大公がアルディングロとアルディングロの父親の殺害を書面でやりとりした可能性は、私たちにはありそうに思えなかった。考えにくいことだが、仮に他に腹心の部下がいたとしても、かくも不首尾に終わった悪事の何を何といっても騒ぎ立てるはずが

なかった。

アルディングロはこれまで以上に上機嫌に振る舞った。そして、パーティの席で話があることに及ぶと、彼は口を噤むか、マルコ・アントーニオはまさに幸せの絶頂で死んだのだから、彼は幸せ者だと讃えた。そして、チェチーリアも結婚生活というつらい軛から考えられるかぎり短時間で解放されて、彼女もまた幸せだと讃えた。

私たちはそれから湖で釣りをし、狩りに出かけ、その際、結局ピンダロスのこのうえなく美しい頌歌を読んだ。ピンダロスは彼の魂を新たに酔わせ、彼の感覚を現在から別世界へと誘った。ロードス島に捧げた頌歌の中の頌歌が特に彼を魅了し、彼はそれをすぐに諳じてしまった。彼の空想は再びすっかりポエジーという神々の領域に入り込み、ギリシャの若者たちの行動は彼の心を魅了し、甘美な愛やそのような行為こそが、厳かな春の生命なのだと彼は称賛した。彼のすべての活力は荒れ狂い、凶暴になっていった。彼は世界の新しい舞台に出て行こうとした。そして、もはや彼をとどめることはできなかった。

チェチーリアが旅立ってから丸二週間と経たないうちに、彼は出発した。彼は前もって彼の叔母に、ジェノヴァへの転居を知らせた。彼はそこから船でフランスに向かい、スペイン、さらにはポルトガルの最果ての海岸まで徒歩で向かうつもりだった。彼はそうこうするうちに、チェチーリアのことを私の心にとめさせ、そのため私は彼女について折りを見て彼に知らせてやることになった。彼女が自由の身になったらすぐに、私たち三人で一つの友情の輪を形作るように手を尽くさなくてはならなかった。私たちの秘密を保つために、私たちは他人には判読できない文字を考案し、肝心な点では近代ギリシャ語を使うことにした。彼が帰ってくるかどうかは、今後の状況次第だということだった。

ジェノヴァへの旅をアルディングロは徒歩で行おうと決めた。そして生涯を通じて、美しい地方に行くときには常にそれを守るつもりだった。彼は健康で丈夫で特に急いでいない場合には、それ以外のやり方で旅することは愚かだとみなした。土地柄や諸民族の個性は、他のいかなる方法で

もこれほど良く知ることはできず、追剥についても、馬車に乗るほうがはるかに危険で、最も悪質な追剥でも、彼女のような上流階級のような富を持たずに、ただ普通に徒歩で旅を続けている庶民を襲うことは思いとどまるだろうとアルディングロは考えた。

彼は自分の持ち物をすべて私のところに残していった。ぎっしり詰まった財布を一つと、身につけているもの以外に一着のシャツと一足の靴下の他は何も持たなかった。

ある晩、彼は私の母に別れの挨拶をすると、彼女ははらはらと涙を流し、彼を胸に抱きしめた。母は彼を私の実の兄弟のように愛していた。彼女は彼に心からの祝福をおくり、それを聞き届けて欲しいと神に祈った。なぜなら彼はすぐにも旅立とうとしたからだ。そして最後に彼に、彼との交際をこれからもたびたび懐かしく思い出すことがあるでしょう、と言った。私たちは彼女に、彼はまた故郷に帰るつもりだと思い込ませた。

私たちはそれから、共にその夜を過ごした。その夜は、まるで皆の眼差しが相手の心の奥底まで見通してしまうまさに生命の澄んだ源のようだった。私はこれ以上の至福のひと時を望むことは決してないほどだった。ああ、なんということだろう！人間とは何なんだろう？それはあらゆる面で運命によってずたずたに引き裂かれ、荒れ狂う大波の中を翻弄され続ける一つの点なのだ。

朝方、彼は跳ね起き、彼のためにきれいにきちんと筆写してはなむけに贈った『ソクラテスの思い出』の古い写本と、ヘンリクス・ステファヌスのギリシャの叙情詩の注釈書をポケットに入れた。そして自分のツイターを無造作に肩に乗せたため、激しい音がした。そして私をもう一度抱きしめ、全霊を込めて私の唇に口づけすると、あっという間に姿を消した。私はまるで死の恐怖に襲われたかのように身震いし、墓の中に入るかのように身をすくめた。この世で友もなく過ごすという不幸と悲惨！そして二人だとその価値が倍になる誇りと歓喜と勇敢さよ！

母と私はそれから十月末に再びヴェネツィアに行った。そこには私の父がすでにダルマチアから帰国していた。そこへの道は私を悲しみで満たし

た。その土地も人々も建物もかつての魅力を失い、まるで影のようにただそこに存在しているだけだった。私は、何でも物事を楽しむには互いに愛し合う二つの心が必要なのだと心から悟った。

父と父のお供をした私の兄たちと未亡人になった姉だけが家で私の心痛を和らげ、鎮めてくれた。チェチーリアはまだ厳しい監視のもとに置かれていた。美しいばかりか、態度もとても賢く控え目だったため、私も陰で尽力した。この心優しい少女は生まれ持った気質のため、そのように振る舞わざるをえなかったのだ。

才能豊かでアルディングロをよく知る何人もの若者たちが私のところにやって来て、彼が現在どこにいるのか聞き出そうとしたが、私は彼は故郷に帰りがついていたとだけ思わせて彼の居場所は教えなかった。

十一月初めに、私は友から次の手紙を受け取った。

ジェノヴァ、11月。

僕がこの世に二つとないような多くの河川が流れているロンバルディアの肥沃で広大な谷間から、アペニン山脈の荒々しい荒涼とした岩だらけの曲がりくねった道を登り、ついにポケットを抜けた時、澄んだ空気があたりを包み、巻毛が僕の熱いこめかみのまわりをなびき、上の高みから、広く深い海が僕の眼下でタペの甘美な明るく輝く雲に包まれてきらめくのを目にしました。神よ、この光景はなんと強烈に僕の心とすべての感覚をとらえたことでしょう。ホメロスのテーティスがオリンピアから一飛びで行ったように、僕も永遠の生命の充溢の中へと飛び込み、鯨のようにそこで心ゆくまで泳ぎ回り、僕のあらゆる苦悩を冷ましたいものです。

ここでは僕はこの土地の生き字引である一人の年老いた羊飼いのところで夜を過ごし、星が昇っては沈み、そして世界を照らす光が現れ、イタリア全土に君臨するのを見ました。この楽園は、そのすべての住民とともに太古の時代から、人間と動物と植物と木々と僕を一つの穏やかな全体へとまとめ上げていたのです。かくも純粹かつ神聖に僕の魂は万物と一体となっていたのです。

朝が来ると僕はそこを下り、午後は町から遠くない海岸にある魅力的な村で眠りました。真夜中ごろ、弦の響きと心にしみ入るような歌声で再び起こされました。僕は耳を澄ませ、歌声を聞き取ると、窓辺に駆け寄りました。その音楽は、高い松と糸杉と低い果樹の中から、まるで海から顔をのぞかせるように突き出ている丘に建てられた古い廃屋から聞こえてきました。それは僕もよく知っていたブルチのメルヘンのスタンザでした。さらにそこに女性の歌声が男性の歌声に加わってきた時、僕もギターを取り出してそっと音合わせをし、彼らが歌い終わると、彼らの悲しげなくつかのハーモニーのあと、もっと陽気なハーモニーへと移行しながら歌いました。《僕をすっかり魅了して眠りから覚ますその甘美な歌い手さん、あなた方はどこのどなたなのですか？人々にかくも喜びを与え、静かな夜更けに心を震わせてくれてありがとう。》

《私たちは愛らしい子供を眠らせようとしている娘とその父親です。暑い日差しに疲れ切った夫もいっしょです》、と答えが返ってきました。そしてやがて長い鬚を生やした一人の老人が入口のアーチのところに姿を現しました。

《ああ、幸せな方たちよ！》、と私は答え、続けて、感激して皆が思いのままに生き、いまだ一人の暴君ファラリスも三つの岬を持つ黄金の島シチリアを搾り取ることがなく、一人の皇帝も民衆の血を大地に流すこともなかったヘスペリアの太古のサトゥルヌスの時代を歌いました。

《あなたはどなたですか、高貴なお方？》、と彼はそれから私に訊ねました。

《この世の優れたものを求め歩いて、この地でちょうど蜜で魂を癒している若い巡礼です。》

彼は下りてきて、僕は彼のほうに歩いていきました。僕たちは挨拶を交わし、盃を満たしました。彼は六十間近の真の詩人の容貌を持ち、ホメロスのような理想の容貌を多く持つものの、盲目ではない素晴らしい男性でした。この高貴なイオニアの詩人は実際は盲目ではありませんでした。凡人が常に空の頭で見ているものだけを見なかったのです。そこから彼はつ

いに、盲目だったという機知に富む名をもらったのです。そして彼のイメージを考案したギリシャの芸術家は、人々の機知をもとにしたのです。僕たちはすぐに親しくなりました。彼は元は建築家だったのですが、仕事がありませんでしたので文芸を愛好する心に従ったのです。そして彼は今やこの地方一帯で最良の即興詩人の一人と見なされているのです。即興詩人として彼はこの地方を旅して回り、人々を楽しませているのです。彼の妻は早くに亡くなり、彼は一人娘を数年前に一人の実直な農夫に嫁がせました。その農夫はここに農園を借りていて、彼の家にこの老人はたいてい滞在しているのです。農園はほんとうに黄金時代のもののようで、僕はそれをあとで満ち足りた思いで実際に目にしました。

僕もちょうど彼がかつて建築の仕事をしていたように、絵画に取り組んでいたと彼に言いました。このことは彼を心から喜ばせました。彼は僕の頭をつかむと、自分の灰色の鬚に押しつけ、僕に何度も口づけをしました。そしてそれから弦楽器を取り出すと、さながらアポロンの真の祭司のように熱心に文芸を讃える歌を歌いました。そのため僕は満足感に浸って、身動きひとつできませんでした。村人の半分がやって来て、ドアと窓を開けて控え目に拍手を送りました。そして彼が歌い終わると、海は一層力強く岸に打ち寄せるように思え、皆が叫び声を上げました。『ボッカドーロ万歳！《これが彼の名でした。

退屈しのぎに、僕はそれに対してお返し之歌を歌い始め、ピンドロスのアポロンの黄金の豎琴Χρυσέα φόρμιγξ Απόλλωνοςの場所と状況を変え、最後に僕の前にいる老人の人生を歌い、彼の地位を王侯の地位よりも尊いものとして描きました。すると、歓喜の叫び声が沸き起こりました。『美しい異国の若者と神々しい老人万歳！《そして人々はそこを立ち去り、僕たちも朝方別れました。

僕は日が高くなると散歩がてら丘に登り、ジェノヴァの町並みを眺めました。昔から海を支配するべく住民を駆り立て、そこから常に偉大なる海の英雄たちが生まれてきた魅力的な劇場。聖なるコロンブスと汝、アンドレア・ドーリアよ。汝らは今やテミストクレスやスキピオのような偉人た

ちとともにエリュシオンの楽園で、肩を並べて歩き回っているのだ。汝ら人間の中の半神たちよ。埃にまみれて僕は汝らを崇拜する。ああ、僕にもそのような運命が定められていたら！僕は海水の測りがたい領域に目をやり、巨大なる威厳、荘厳さに胸が張り裂けそうでした。僕の精神は沖合の深みのはるか上空を漂い、名状しがたい喜びの中でその無限さを全身で、余すところなく味わい尽くしたのです。

かくも力強く強烈に魂を満たすものはこの世に他にありません。海こそが僕たちが地上で持つ最も素晴らしいもののなのです。太陽と月と星はそれに対して、個々の輝く点にすぎません。その上のエーテルの覆いもまた同様に、現実の飾りにすぎないのです。海こそが真の生命なのです。人間は自然が拒絶した翼を獲得し、自分の中で他のすべての生き物たちの完璧さを一つにするのです。海を知らないものは、僕には人間の中で飛ぶことのできない鳥、あるいはダチョウやニワトリやガチョウのように翼を使わない鳥のように思えます。ここには永遠の澄明さと純粋さがあります。町の片隅に住む私たちの中で巣くっているあらゆる卑小なものは、ここでは巨大な塊によって掃き清められるのです。あそこで海のアλπスのような大波が沸き起こっています。アスパシアやフリュネーのもとにいる英雄たちのように。水平線の柔らかな線がなんと見事な曲線を描いていることでしょう！大海原に僕は歩み出していきたい。僕の胸は何と高鳴っていることでしょう！

ボッカドーロは、僕が再び農園に戻って来ると、もう僕を待っていました。彼は、僕にも丸一週間続く大きなお祭りに、今日同行して欲しいと言いました。

S侯爵は、フレゴザ家の若い娘と豪華絢爛な結婚式を挙げました。花婿は今や、おそらくヨーロッパの最も裕福な市民の一人だとされています。この夕べに、競馬が行われ、そのあと宴会と舞踏会、明日は闘牛と言った具合に、毎日新しい娯楽や楽しみや出し物が用意されていました。喜劇や綱渡りや様々な芸や見せ物や出し物が地上と会場で催されることになっていました。老人も別の音楽の合間に食卓で歌を歌うように求められてい

ました。そして彼は僕もその準備をするようにと懇願したのです。僕たちは会場に向かう途中で掛け合いの歌のための素敵な主題を考え出すことができるはずでした。邸宅は町から数マイル離れた湖の対岸にありました。彼の義理の息子の数人の下男が、僕たちを彼自身と彼の娘とともに小舟でそこに運ぶはずだとのことでした。しかし彼は、僕がこれらすべてのことをすでに知っていて、たぶんまさにそれゆえにここにやって来たのだらうと信じていました。

僕はこの婚礼の祝いのことなど全く知らずにここにやって来たのだと老人に断言しました。そんなに高貴な人の集まりでは、僕は即興では歌えず、その上、僕はいつもまず最初に聴衆の心とファンタジーに訴えかけやすくするために、聴衆のタイプを少しばかり知る必要があります、そうでないと、どんな名曲でもうまく行かないのだと言いました。しかし、僕は彼のお供をすることにしました。彼の祝いの歌を聞けると思うと、それだけでとても魅力的なことでした。老人は僕を彼のツイターの調律師として宴席に伴い、連れていくことができると言いました。

僕はそれからとても善良で快活な若い主婦の彼の娘と、快活で優秀な農場管理人の彼女の夫と小さな天使のような息子と知り合いになりました。その様は、美しい一つの全体、まとまりが生き生きとした統一がとれていました。小さな田舎の城の古い蔦が生い茂った廃屋の内部は、きちんと整えられていました。僕は正午ごろ、彼らの家で健康的でおいしい簡素な食事を取りました。食後、僕たちは皆、数時間昼寝をし、それから僕たちは出発しました。海の波が僕をいつまでも楽しませました。緑色がかった澄明で柔らかく、恐ろしいものの愛らしくもある、陰しく切り立った深海の海面では、小さな波のひとつひとつが計り知れない大海の娘として、威厳に満ちた姿を見せていました。

続く